

②人が行き交う都市と農村

耕作放棄地を転換した市民農園や、古民家を再生した宿泊施設などを利用して、週末を多自然地域で過ごす人が増えており、都市住民の多様なライフスタイルの支援や学習機会の提供によって、農村の活力向上につながっている。

2040年の生活シーン

<プロフィール>

- 50代の男性。丹波の多自然地域にあるNPO法人で、都市住民の短期滞在や移住を支援している。
- もともと丹波の出身で、都市部で広告関係の仕事をしていたが、そろそろ丹波に戻りたいと地元の友人に話していたところ、このNPOが事務局職員を募集していると教えてもらい、応募したところ運良く採用された。市民農園を使った営農指導や地域の自然を使ったワークショップなど、農村の魅力を都市の人に感じてもらうための事業を実施している。

<市民農園>

- 市民農園は、以前は耕作放棄地だった場所だが、NPOが地主から管理を受託し、窓口となって貸し出している。山間の土地なので面積は小さいが、周囲の山や棚田の風景がとても美しく、農園紹介のホームページはその素晴らしさを感じてもらえるように作っている。
- 平日は都会で働き、週末は農村で過ごす人が増えている。市民農園は空きが出るとすぐに借り手がつく状況で、多くの地主に働きかけ、提供区画を増やすことが今の課題だ。NPOの理事長は家業の野菜苗の生産卸業を継ぎ、ずっとこの地域で暮らしてきた人なので、その人脈を生かしながら、区画の提供をお願いしている。

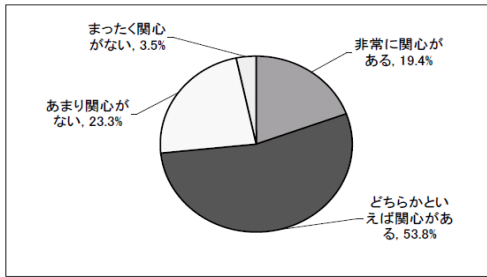
<週末の風景>

- 都市部とこの地域の間は高速道路と一般道が整備されており、車で1時間もかからない。今週末の訪問者の中に、阪神間の高層マンションに住む男性と小学生のお子さん2人がいた。緑豊かな環境に、子どもたちの表情は輝いている。
- この男性の農園は収穫期を迎えており、今日はトウモロコシの収穫日。家族3人で収穫にあたり、生でも食べられる品種なので、その場で早速かじっていた。自分たちで育てたトウモロコシはとても甘く、美味しかったそうだ。
- NPOでは営農指導をする地元の人を紹介しており、次に何を育てるかの相談もできる。この方は、来年空きが出たらさらに2区画借り、野菜の種類を増やして、マンションの隣人にも収穫物を配りたいと言っていた。
- 実は、営農指導の人も丹波で農業を始めたIターン者だ。NPOでは移住者向けの住居として、空き家になっている古民家の賃貸仲介も行っている。市民農園の借り手の中にも、退職後の移住を視野に入れ、農業を本格的に始める計画を立てている人が何人かいて、そうした人から、良質な住居を探したいという声がある。生まれ育った家を貸すことに抵抗を感じる家主もいるが、NPOが説得して貸し出し物件を発掘するとともに、快適に住むためのリノベーションも請け負っている。
- 都市部から来た人は、農作物の出来具合や天候の見込みなど何気ない会話をする中で、いつの間にか近所の人と親しくなっている。空き家だったところに人が住み出したおかげで、集落が活気づいてきたと、地域の人たちから言われることが多い。

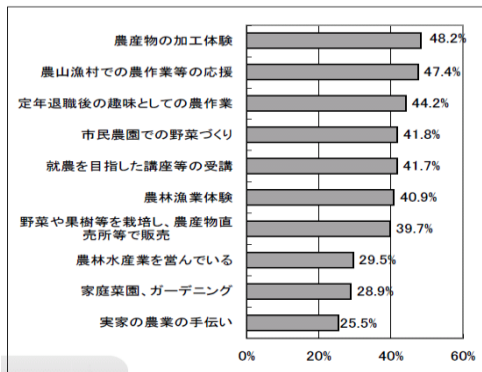
現状や課題

【農村との関わり（県）】

○都市農村農流や農山漁村地域での一時滞在・定住への関心



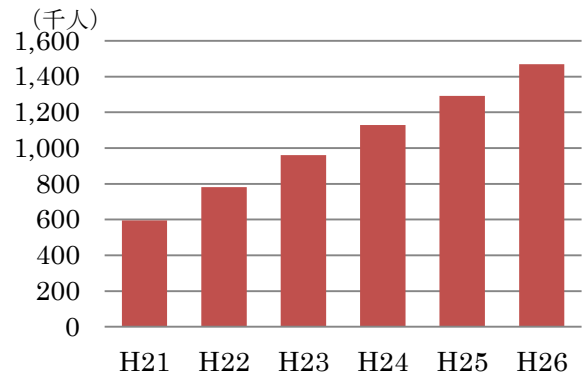
○今後取り組みたい「農」に親しむ取組



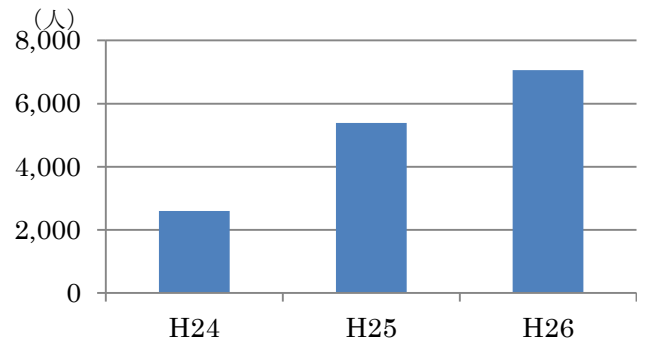
(出典：平成 24 年度「第 1 回県民モニターアンケート結果」)

【農業体験の推移】

○兵庫楽農生活センター体験者数



○都市農村交流活動参加人数（県）



(出典：兵庫県ビジョン課作成)

見えてきた兆し

【農業体験の様子】



写真左上：手植えによる田植え実施
写真右上：ボランティアによる黒豆選別
写真左下：市民農園

(出典：兵庫楽農生活センターHP・兵庫県「ひょうごみどり白書 2014」)

【移住体験取組例（養父市）】

○ふるさと交流の家「いろいろ」（3階建養蚕住宅を改修した体験施設）



(出典：兵庫県)

○暮らしセミナーでの農業体験



(出典：やぶぐらしネット)

【専門家等の意見】

○都会の人と農村の人では価値観が違い、都会の人が求めるものを農村の人が認識していないことがある。